

〈史料紹介〉

アメリカ女性下士官が撮した占領下の横浜

メアリー・ルジェーリ・コレクション

Occupation-era Yokohama photographed by a member of
the U.S. Women's Army Corps

The Collection of Mary Ruggieri

大西 比呂志

Hiroshi ONISHI

【アメリカ人カメラマンと占領下日本の表情】

敗戦と占領下の日本人はどのような姿、表情をしていたのか。これを来日した何人ものアメリカ人カメラマンが捉えている。ジェターノ・フェーレイスは、マッカーサーと天皇の会見を撮ったことで有名だが、東京・横浜の様子を稀少だったカラーフィルムで撮影した写真集は、廃墟の時代のイメージを変えさせるものである¹。佐世保に上陸した海兵師団の一員ジョー・オダネルが、広島、長崎の爆心地とそこにいる（いた）人々を撮った衝撃的な映像（最も有名なのは「焼場に立つ少年」）は、現在でも多くの人々に原爆の悲惨さを伝えている²。このほか8月28日に相模湾に進攻した米海軍のカメラマン、ジョン・スウォープは、大森収容所での捕虜解放の様子をはじめ、芸術的な感性で当時の日本人、進駐軍兵士の表情を捉えている³。日本人に写真を撮る余裕がなかった敗戦直後、いち早くやってきた物量豊富で好奇心旺盛なアメリカの従軍カメラマンたちの貴重な写真記録である。

フェーレイスは映画俳優出身で通信隊写真センターに配属されたマッカーサー専属のカメラマン、オダネルは新聞社の暗室係か

ら海兵隊の公式カメラマン、スウォープは雑誌『ライフ』や空軍の専属カメラマンといった経歴を持っている。これら著名なカメラマンたちは、米軍専属のプロの男性写真家であった点で共通している。

しかしこれらと全く別のまなざしで占領下の日本をとらえた人物がいる。メアリー・キデイ・ルジャーリ Mary A. (Kiddie) Ruggieri であり、その著書 *From Japan With Love 1946-1948 A Remarkable memoir of post-war Japan. Told in Letters and Photographs* は、占領下日本の庶民の姿を撮した記録である⁴。

この本は1946年10月3日、当時25歳のメアリーがカリフォルニア州の米軍キャンプをバスで出発したことを家族に知らせる手紙で始まる。陸軍婦人部隊〔Women's Army Corps 略称 WAC〕の完全装備に身を固めた彼女を港で待ち受けていたのは陸軍輸送船、行き先は日本、占領軍の拠点・横浜であった。以後、1948年5月21日の手紙まで、WACの女性下士官として横浜で勤務のかたわら日本各地の見聞を多数の写真を見せて家族や友人にあてて書き送った記録であり、「われわれをやすやすと彼女とともに占領下の横浜へ連れだってくれる」（序文）、またとないガイドブックである。

この本では横浜に司令部を置いて日本占領軍政の主力となった第8軍 Eighth Army の兵士・下士官（GI、EM）や WAC の公務と日常が詳しく記述され、日本人の庶民生活（ヤミ市、女性、子どもたち、横浜近郊の農夫など）の観察、日光、東京、鎌倉、軽井沢ほか行く先々での見聞は、驚きとともにユーモラスや皮肉、無邪気な正義感、感傷を交えて記されている。そして何より魅力的なのは随所に挿入されている彼女が撮った数多くの写真で、それらはオダネルやスウォープら専門の従軍カメラマンの印象と異なるものである。

本書「序文」によれば、メアリーが所蔵する写真は約4,000枚、

巻末にはアルバム原本の写真とともに著者が使用したカメラの性能や仕様（35mm Mercury II Model CX）のほか、フィルムの種類、現像場所などの技術情報が紹介され、メアリーの写真が趣味の域を超えた本格的なものであること、本書に掲載された写真がそのごく一部であることがわかる。

【メアリー・キディ・ルジャーリ】

著者メアリー・キディ（結婚後、ルジャーリ姓）は、1921年サンフランシスコで3人姉弟の末娘に生まれた。父は銀行に勤めるかたわらアマチュアの芸術家、写真家で、彼女の写真愛好は父譲りのようである。サンフランシスコの公立ローウェル高校を卒業し、カリフォルニア州立大学バークレイ校で心理学を学び1943年に卒業した。その後ミネソタ大学に入学し児童福祉を専攻した。

1944年7月大学で卒業論文を書いているときに、キャンパスにWACの徴兵官がやってきて負傷兵の精神医学的ケアを支援する女性を捜していると聞いて深く揺り動かされ、10月末、心理学を専攻する友人とともにWAC志願の宣誓を行って入隊した。

この時期はヨーロッパ戦線、太平洋戦線ともに激戦の段階で、多くのWAC志願者が出ており、両戦線に多数の人員が派遣された。マッカーサー率いる南西太平洋地域でも1944年末までにWACは4,700を越える下士官、330の将校が配属された。ヨーロッパ戦線が終結した1945年6月末にWACの人員は士官5,733人、准士官44人、下士官90,180人の総計95,957人でピークとなっている⁵。

メアリーは1944年12月ジョージア州フォート・オーグルスロープで基礎訓練を受け、ついでフロリダへ送られた後、ワシントンDCやウェストバージニア州の病院で主に頭部を負傷した兵士の脳波測定や麻痺治療（言語の回復）などの仕事についた。日本降伏のころには2等軍曹 Technical Sergeant になっていた。

退役も考えたがその頃マッカーサーの連合軍最高司令官総司令部 GHQ/SCAP は男性兵士の復員を補い、拡大する日本占領軍政をまかなうために WAC の派遣を要望しており、メアリーもまた「世界のほかのところ、アメリカと戦った日本という国の人々を見てみたい」との気持ちから日本派遣に志願したのであった。

【日本の WAC】

太平洋地域のアメリカ軍の動静を伝える “*Stars and Stripes*” (『星条旗新聞 太平洋版』) は、9 月下旬に第 8 軍司令部に書記、速記タイピスト、統計編集者などを配属する WAC 分遣隊 200 人余りが到着予定と伝えている⁶。

メアリーは 1946 年 10 月 3 日、カリフォルニア州ピッツバーグのキャンプ・ストーンマンからバスでサンフランシスコに出発、フォート・メーソンよりアドミラル・シムズ号で日本に向かった。メアリーが所属したのは第 8000 婦人分遣隊 WAC Detachment で、日本への陸軍婦人部隊の第一陣であった⁷。同号はエンジンの故障で一時サンフランシスコに引き返したが、メアリーはひどい船酔いに悩ませられながら艦上で訓練を行い、10 月 14 日横浜港に入港、下船待ちの末 16 日に上陸した。その日上陸したのは約 150 人であった⁸。

メアリーのコレクションのなかには “*8000th WAC Detachment, the first in Japan, 16 October 1946*” があるが、部隊の公式な歴史を記述したものではなく、日本第一陣のこの部隊の詳しい歴史や組織はわからない。ここではいくつかの資料をあわせてその概略をたどってみよう。

まず第 8000 婦人分遣隊の任務は、第 8 軍司令部とその下位司令部に配属された女性下士官に訓練、管理、宿舎、補給、レクリエーション施設を供給することであった。同書には、8 軍の技術、補給、特別業務、輸送、軍政、監察、広報などで働く WAC の姿

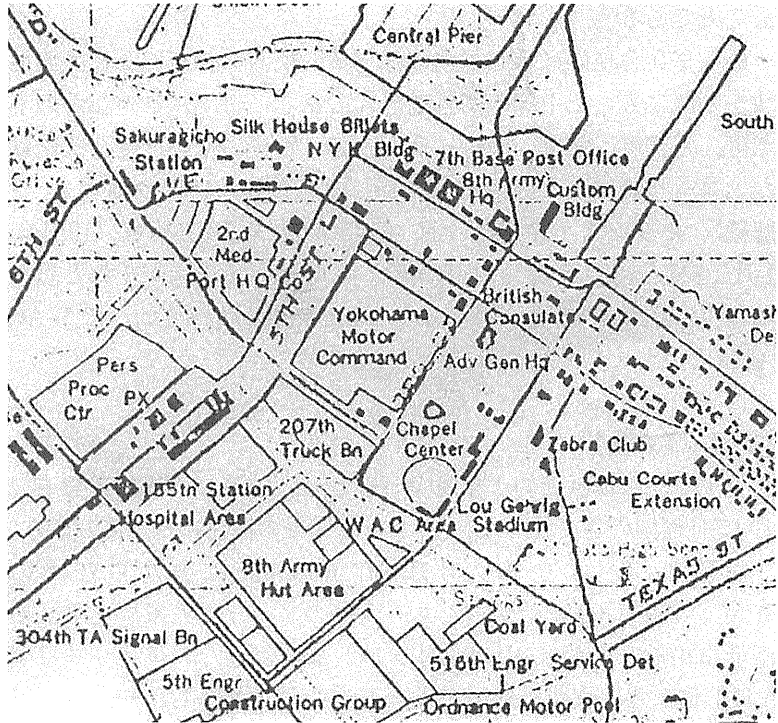


図1 Yokohama City Map 1949 (横浜市史資料室所蔵)

が紹介されており、部隊固有の活動というよりも他の部隊・組織への人員補給を任務としたようである。

この部隊は第8軍司令部特別軍団の一つで司令部直轄に置かれた⁹。所在は第8軍兵舎地区内で、隊長はJ. M ブラウン中尉、幹部にE. L. ギヴンス中尉、オルダリー・ルームとデイ・ルームがあった¹⁰。これが1949年7月時点になると、部隊長は大尉のA. スタウト、サプライ・ルームとグリーンゲープルス・クラブが加わり、税関ビルに人事係が置かれている¹¹。順次組織が拡大されたようで、同部隊の人員は、1947年1月現在で第8軍配属として下士官135人ほか合計137人、特別軍として将校2人、下士官5人合

計7人である¹²。

第8軍兵舎地区は第8軍司令部（横浜税関に所在）など港湾地域から西に入った中区の関外地区に広がる一帯で、このなかの不老町、万代町、翁町、扇町に女性士官・軍属の宿舎地区が置かれた。コーリアコート（1945年10月13日接收、1954年3月31日解除）、ホランディア・コート（1945年10月13日接收、1954年1月16日～1958年3月26日解除）と呼ばれる地区がそれと思われる¹³。1949年に米軍作成の“*Yokohama City Map*”でWAC Areaとされているあたりである（図1）。

【帰国・その後】

メアリーは横浜で約1年半WACとして勤務した後、1948年4月17日帰国の途に就いた。アメリカ帰国後の消息にふれておこう。

病院船リパブリック号USAT Republicは彼女ら79人のWAC、100～200人の兵士たち、大勢のアメリカ人家族を乗せ横浜港を出航し、船は4月30日シアトルに着いた。メアリーは翌5月1日上陸、直ちに除隊となった。その日のうちにサンフランシスコのわが家へと飛行機で飛んだ彼女は、次の金曜日の朝には先に帰国していた婚約者フランシス・ルジェーリ（通称フランク Francis Ruggieri）と再会し、6月にはフランクの故郷ペンシルバニアで結婚に至る。以後はともに復員兵援護法 GI Bill を使って1950年同地のピッツバーグ大学を卒業し、さらにサンフランシスコのヘイスティングス・カレッジ・オブ・ザ・ローで学んだ。

メアリーはこの間、ときにデパートで化粧品販売をするなど家計を助けながら、サンフランシスコの在郷軍人病院で聴覚療養士として働き、さらに全米作家クラブコンテストなどを受賞し、全米女性ペン協会のメンバーでもあった。1957年に家族はモデストに移りこの間第1子を早く亡くしたがトム、リチャード、ケイト、スレサの2男2女に恵まれた。夫フランクは2001年に死去

した。

【メアリー・ルジェーリ写真コレクション】

メアリーの著書と写真の存在を教えてくれたのは、日米関係史の研究者ロジャー・ディングマン氏 (Roger Dingman、南カリフォルニア大学名誉教授) であった。さっそく著書を取り寄せてみてこれらが横浜だけでなく日本占領期の資料として重要な価値を持つものと考え、以来ぜひともメアリーに会ってそのオリジナルを確認し、可能なら横浜で多くの人たちが見ることが出来るようになればと念願した。

幸い2011年度に科学研究費の助成を得て¹⁴、また本学フェリス女学院大学より在外研修としてカリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) に客員研究員として渡米することができたので、同年8月末、同州サン・ラファエルにある発売元出版社に連絡をし編者にコンタクトすることができた。編者はバークレイに住むメアリーの次男リチャードであった。

以来リチャードとの間で何度かメールを交わし、その結果12月上旬にバークレイの自宅に訪問し、その2日後にはそこから車で約2時間の距離にあるモデストに住むメアリーに面会することができた。その時90歳のメアリーは愛蔵のアルバムを前に、占領の時代横浜の人々が廃墟から立ち上がろうとしていた様子などを回想し、I love Japanese children, I love Yokohamaとも話してくれた。そして自らの青春の思い出である貴重なアルバム原本を、全て横浜へ貸与し広く横浜市民に公開することを許可してくれたのである。

その後、実際上の交渉と手続きは資料が持つ歴史的価値を鑑みて横浜開港資料館 (中区日本大通り) にお願ひし、日米間での貸借契約、複製作成、公開利用に関わる手続きが進められた。途中、メアリーの体調が悪くなって進捗が滞ることもあったが、リ

チャードは横浜サイドの希望に対し最大限理解を示してくれ、利用規約などの契約書を交わした後に、アルバム9冊と付属資料が2012年4月中に同館に送付された。横浜開港資料館でのデジタル撮影による複製作業は8月下旬までに完成し、終了後直ちに原本すべてが無事メアリーのもとの返却された¹⁵。

【写真コレクションの主な内容】

横浜開港資料館で複製されたメアリー・キディ・ルジェーリ写真コレクションは、写真アルバム9冊とバラ写真、および関係雑資料からなる。基本的に借用資料すべてを撮影し、アルバムは写真添付の状態のまま各ページを1コマ撮影し、重要と思われる写真は選別して1枚ずつ1コマ撮影が行われた。

メアリーは初めて来た外国・日本、横浜でみる様々な風物、建物、人々を好奇心旺盛な眼で写真に収めている。配給に列をなして並ぶ人々（*From Japan With Love 1946-1948*, 46p 以下頁のみ記す）、大量の荷物をひく牛車（172p）、和式トイレ（38p）、公衆トイレ（52p）、人力の霊柩車（32p）、木炭車（42p）人糞を運ぶ牛車（55p）などは驚きと興味の対象であった。

横浜の街中では、関内、伊勢佐木町、山手の様々な建物、行き交う米軍兵士や日本人たち、復員兵や子供、赤子を背負った女性、杖をつく年寄りなどの姿、横浜税関（第8軍司令部）、横浜地方裁判所、神奈川県庁、英国領事館、加賀町警察（228p）、横浜郵便局、アメリカ領事館（241p）、日本郵船横浜支店（HQ Military Railway Service 243p）、神奈川赤十字社（231p）、カフェ・ヨコハマ（234p）、グランドシアター

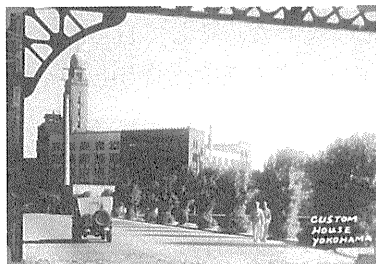


図2 横浜税関（第8軍司令部）

(243p)、NCO クラブ (240p)、写真館 (242p)、ルーゲーリックスタジアム、野戦病院、ヤミ市、水上生活者のはしげが密集する大岡川 (27p)、山手のセントジョセフカレッジ (236p)、カソリック山手教会、山手聖公会などの写真が



図3 カフェ・ヨコハマ

ある。DDT を飛行機で空中から散布する様子 (156p) やカマボコ兵舎内の様子 (156p、177p) など珍しい写真である。

メアリーは友人や婚約者フランクと米軍専用列車、ジープなどで様々な地方へ出かけており、郊外の農村の様子や観光地の景色・街並みを残している。ざっと挙げると、日光 (1946年11月)、伊豆・川奈 (1947年1月)、軽井沢 (同2月)、京都・奈良 (同3月)、蒲郡・熱海・箱根 (同4月)、沼津 (同5月)、伊勢志摩 (同6月)、雲仙 (同7月)、鬼怒川・富士山 (同8月)、仙台 (10月)、志賀高原 (10月) などである。伊勢志摩では御木本幸吉と面会、仙台では駐屯する第11空挺師団でパラシュート降下の体験をしている。また1947年6月15日横浜発の夜行の占領軍専用列車で大阪、広島、小倉、博多をへて長崎県諫早へ行き、被爆地長崎も訪問している。広島 (148p)、長崎 (150~153p) の被爆の跡の写真、とくに長崎で「原子爆弾中心地」と書かれた大きな矢印状の看板が突き刺さった地点での米兵らの集合写真は、メアリーも後列に写っているのでメアリーが撮ったものではないようだが、日本人には衝撃的な一枚である (152p)。

婚約者フランクも写真を撮るのが好きだったようで、11月25日付け家族宛手紙では、「いくつか面白い写真を送ります。ほとんどはフランクと私のものです。私たちはともにカメラ中毒になりつつあります」とあり (54、55p)、彼女の写真コレクション

にフランクが撮ったものがいくつも含まれているようである。

【占領下の横浜】

メアリーは日本の第一印象を「最初にごく自然に私たちがみたのは、おだやかな空のかすみの層から現れた富士山の裾野でした。近づくにつれ富士山はまさにとらえどころのない存在だと知りました。船が島の浅瀬を抜けるにしたがって富士山が見え隠れしました」とし、「横浜港とサンフランシスコ港はとても似ていますが、いま私たちが入ろうとしているこの港は端に灯台のある狭い防波堤で4分の1マイルの間隔で作られた水路が自慢のようです」と記している（6p）。

岸壁でのかんたんな歓迎式典のあと慌ただしく船のタラップを降り、トラックに詰め込まれて市内を猛烈な勢いで走り出した荷台の後ろから、彼女は「はじめて背中に赤ん坊を負った鮮やかな着物を着た日本女性、裸足に木のくつ（下駄）をはいた女性を見ました。私たちはとてつもなく大きい荷物を背負った奇妙な格好の労働者も見ました。私たちはなにも見逃すまいと、そして頭の中はあらゆる新しい印象を受け入れようと泳ぎ回っていました。私たちはかつてそのような光景を見たことはありません」（8p）と初めての日本人の姿に強い印象を受けたことを記している。

【兵士たちの日常】

こうして到着したのが中区不老町、万代町、翁町一帯に置かれた婦人部隊兵舎地区 WAC Area である。ここは「約4エーカー四方にトビ色のカマボコ兵舎が点在し、約2,000人の男が食堂、娯楽室、



図4 アメリカ人への好奇心（原著キャプションから）

司令部でおびたしいホコリとドロといっしょにひしめき合っています」(11p)。

彼女のカメラはこうしたカマボコ兵舎の内外での占領軍将校、兵士たちの日常を撮してあますところがない。さっそく街に出かけた様子はこうである。

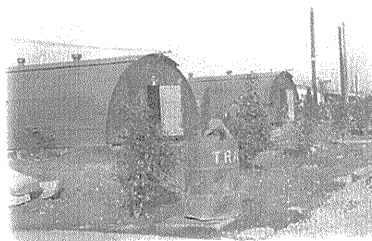


図5 WACの兵舎

「木曜日の午後、仲間のひとりがガイドを申し出て、横浜のメインのショッピング地区に出かけました。宿舎地区と同様、それらの地区も爆撃されましたが、今は紙と木の一時しのぎで再建されています。キャンプのすぐ外では以前会社や工場だった多くの瓦礫があります。どの店もみすばらしく安っぽい土産店のようなもので、彼らは進駐軍になんとか買ってもらおうとばかげた値段をつけています。着物は800円前後ですが、1ドルが15円とするとそれは約50ドルもすることになります。そんなことが合法的なマーケットで通用すると想像できるでしょうか。ごみ同然のどんなつまらないものでも300円を下りません。ほとんどの店主は片言の英語を話し、私たちの腕をとって引っぱり込むと店のものをみんな出してしつこくします。刺繍であしらったものなど本当に愛らしくシルクのようなのですが、その他のものは多少珍しいものはあってもだいたいガラクタです」(19p)。

また別の日には「昼の食事の後、私たちは最正装の制服を身につけ、陽気な若い男性のガイドで横浜のふしぎ発見に出発しました。兵舎地区はかつて大きな会社のビルがいくつもあった所ですが、戦争でなぎ倒されその後アメリカによって再建されています。この地区を離れてまがりくねって湾に注ぎ込んでいる運河のひとつを渡ると、これまた連合軍の報復の空襲で破壊された「横浜の

銀座」と呼ばれる地区に出ます。第8軍司令部として使用されるために提供されたいくつかの大きなビルが残っています。もう一方は進駐軍がお金を落とすために日本人が作ったみすばらしい木造の建物が立っています。私たちは

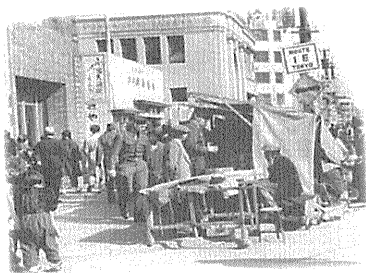


図6 米軍将兵たち

こちらの方に足を向けました。5ブロックも歩きましたが道の両脇には土産物屋以外には何も目にすることがありません。入ってみるとあまりに多い品物の種類にめまいし値段に驚き店主のしつこさを楽しみました。しかし漆器や陶磁器、シルクは素晴らしいものです」(25p)。

【WAC と GI】

メアリーら横浜にやってきた婦人部隊の一群は、男ばかりの占領軍将校、下士官たちの大きな関心の的であった。「私たちが当番の部屋のドアをあけるやいなや、工兵大隊、通信部隊、飛行大隊、かのNCOクラブなどを問わず、私たちはパーティへ洪水のような招待を受けました。私たちはまるで女王様のような扱いです」(27p)。

横浜に来て2日目の夜のことであった。

「その夜はパーティとダンスの数多い招待のなかからどれを決定するかに悩みました。私たちはその夜はこれからの12か月間のための「スタッグ stag～同伴なしの男性」を見に行くことになっていました。しかしこの夜は、私にとって特に重要な日となったのです」(同)。

メアリーはこの夜7時半、基礎訓練時代から仲良くなったキャロルと第8軍NCOクラブへ出かけることにした。出口を捜して

いると彼女たちに寄ってきた私服の若いGIから友人のジープで連れて行くとの申し出を受けた。こうして出かけた「NCOクラブは富裕な日本人貿易会社の3階建てで、1階はバー（やって来ては仲間にビールをせびるスタッグスたちの安住の地）とサンドウィッチなどを用意する小さなキッチンがあり、2階は図書室（ここで誰かが本を読んでいるのを見たことは



図7 NCOクラブ

ありません）、オーナーの委員会が毎週集まりをもつ会議室、そしてクラブを管理する下士官の寝室があります。3階は2人連れ以外立ち入り禁止の、中くらいのダンスフロアとバンドスタンドがあります。この部屋は低いいくつかの照明と、ある理由から青い部屋という名前の青いカーテンで仕切られたボックス席」があった（28p）。

NCOクラブとは Non-Commissioned Officer's Club 下士官用クラブのことでキャンプ・ヨコハマが運営していたクラブとして、ゼブラクラブ（山下町・東京銀行山下支店、接收期間1946年2月6日～1955年9月9日）、クロスロード（日本大通り、朝日生命ほか、同1945年7月17日～1952年8月25日）があった¹⁶。

メアリーはここで「運転してくれた人とその友達にエスコートされ楽しい時間を過ごした」が、この「運転手のGI」が夫となるフランシス・ルジェーリであった。彼女は「10月日曜日」という日付の「みなさん」とした手紙で「二人はすぐさま恋に落ちた」ことを嬉しそうに知らせ、すぐ後の手紙で二人が結婚を考えていることを伝えている（37p）。

この間、彼女は配属が決まるまでタイピストを命じられ不満を

漏らしていたが、正規の教師がアメリカから来るまでの間ヨコハマ・アメリカンスクールに教師として配属された。ヨコハマ・アメリカンスクールは1946年7月第8軍のもとに創設され、幼稚園から第1～9学年までアメリカ軍の軍人軍属の子弟教育のために10月から山手で授業が開始された¹⁷。メアリーのコレクションには、このヨコハマ・アメリカンスクールの外観（36p、157p、189p、190p）、クリスマス会（207p、208p）、校長であるL. マッカートニー大尉（216p）、同僚たちと撮った写真（224p）などが残されている。

【子供たち】

彼女が写した写真のなかでとくに目立つのは子供たちの姿である。軽井沢で小学校を訪ねた時のこと、「建物の窓という窓は破れドアは壊れたままで、雪の積もった丘のように凍り付く寒さのなか子供たちでいっぱいでした。子供たちは男女別々の教室になっていて、先生はほとんどが若い男性でした。彼らは子供たちにとっても良くしているように見えました。ただし私たちがいたからでなければよいですが」（98p）と記している。

通りで遊んでいる子供たち（79p）や進駐軍列車の車窓のもとに集まる少年たち（147p）など、彼女のコレクションのなかに子供たちは数多く収められ A Land of many children（79p）、Children's play is the same everywhere（101p）、Children were every-



図8 子供はどこでも同じ（原著キャプションから）

where (168p) といったキャプションが添えられている。

11月11日のアーミスティスデイ（現在のベテランズデイ）の休日にフランクほか何人かと富士山へと向い途中で車を止めていた時のことであった。「19人ほどのちょっと汚れた日本の子供たちがどこからともなくやってきた。彼らは何もいわずただ立って見つめていたのです。彼らは1インチほどの高さの木の板の靴（下駄）を履いていましたが、私にはなぜ足首を折らないのか不思議でした。フランクは彼らを集め、みんなを抱き寄せた私の写真を撮りました」（52p）。

しかしこうした子供たちとの交流とは別に、東京駅に行って戦争孤児と思われる子供たちを見たショックをこう記している（194p、195p）。

「駅の中で私たちは戦争の姿一人の眼に涙なくしては、そして人間のなんと残酷で愚かであるか心に火を点けるような一光景を目にしました。人間として一本来最も高貴な神の創造物であるはずの一耐え難い肉体的精神的な苦痛を避けようとして、温もりと居場所を求めてボロをまとい、片隅か通路に固まり寒さと飢えに苦しんでいる日本人たちです（乱文を許してください。でもあまりにもひどい光景だったのです）。このような人々を正視することはつらいことですが、それでもそこに彼らがないかのように振る舞うことはできないのです。私は駅の中の汚れと寒さのなかで子供たちを世話している一彼女は子供たちの苦痛を和らげるために衣服を与え、つまり誰かに命を与えながら自らは十分な格好ではない一女性を見たことがあります。恐怖と欠乏のため曇り、輝きのない眼をし、驚いたようにアメリカ人一彼らを打ち負かし降伏させた証としてそこにいる豊かで健康的な一を見ている小さな男の子や女の子。それは信じられないほどの悲しみですが、それが現実、1947年の日本です」（195p）。

メアリーは日本の女性や子供の悲惨な境遇へ同情を示してい

る。しかしそこに自分も彼らを打ちひしがした戦勝国の一員であることへの十分な自覚があるようには見えない。こうしたアメリカ人の無邪気な視点による写真に、今日のわれわれはある種の抵抗感を持つかもしれない。しかし多数の日本の子供たち、庶民がやはり無邪気に彼女に近寄っていたことも、彼女の多くの写真からうかがうことができる。メアリーのおびただしい数の写真は、敗戦と占領下の日本で起きた素朴な交流の所産であり、ひとつの「現実」を撮

していることは確かである。どのようにしてアメリカと日本は占領期を通じて勝者と敗者の境界を乗り越えていったのか、メアリーの写真はそうしたアメリカと日本の国際交流のプロセスを理解するための情報をふんだんに持っているように思われる。



図9 メアリー・ルジェーリ (1921~2013)

【メアリー・キディ・ルジェーリの写真コレクションの公開】

この写真コレクションは、横浜市中区日本大通りにある横浜開港資料館において2014年4月1日~5月6日「戦後70年プレ展示 アメリカ人女性下士官が撮した占領下の横浜—ルジェーリ・コレクションから」というタイトルで、日本で初めて一般公開されることになった。しかしこの企画を進めていた昨年10月5日、残念なことにメアリーはモデストの病院で亡くなった。92歳であった。メアリーは1948年に横浜を離れて以来、再び日本に足を運ぶことは無かったが、若き女性下士官として撮ったその写真がここに66年ぶりに横浜で公開されることになったことは、横浜へ深い愛情を示してくれたメアリーへの感謝と記念のささやか

なしるしとなると思う。この写真コレクションが占領下の日本と横浜の再発見につながることを期待する。

最後に、このコレクションの横浜への提供に終始理解と協力を示してくれた Richard Ruggieri、John Lacey の両氏、現地調査に協力してくれた Jason Taro Somerville 氏、資料の受け入れにご尽力くださった横浜開港資料館の上山和雄館長、中武香奈美主任調査研究員に心よりお礼を申し上げる。

【注】

- 1 『マッカーサーの見た焼跡：東京・横浜 1945 年』（文芸春秋、1983 年）。
- 2 『トランクの中の日本一米従軍カメラマンの非公式記録』（小学館、1995 年）および *Japan 1945: A U.S. Marine's Photographs from Ground Zero*, Vanderbilt University Press 2008.
- 3 *A Letter from Japan: Los Angeles & Gottingen:Grunwald Center for the Graphic Arts*, Hammer Museum 2006.
- 4 Portsmouth Publishing San Rafael, California 2007.
- 5 Bettie J. Morden, *The Women's Army Corps, 1945-1978*. United States Army Center of Military History. 1990.
- 6 *Stars and Stripes* 『星条旗新聞 太平洋版』1946 年 8 月 4 日。横浜市史資料室所蔵。
- 7 同 1946 年 10 月 21 日。
- 8 ちなみに 2 番目は第 8225 婦人大隊で東京の三菱ビルを本部に 400 人以上の下士官が GHQ 及び米空軍で勤務した。 *Stars and Stripes* 1950 年 10 月 16 日。
- 9 “*Occupational Monograph of the Eighth United States Army in Japan*,” Vol. III, 1946.9-1947.12 横浜市史資料室所蔵。
- 10 *Telephone Directory Tokyo*, February 1947 国会図書館憲政資料室所蔵。
- 11 *Telephone Directory Yokohama and Vicinity*, July 1949 同上所蔵。
- 12 *Eighth Army-Troop List 'Records of the Adjutant General World War II Operation Report (8th Army)*, RG407 Box 2843, Sheet No. WOR-18780, 18781 同上所蔵。
- 13 羽田博昭「占領下の米軍施設(1)」『市史通信』（横浜市史資料室）第 11 号、

2011年7月31日.

- 14 「近代日本のグローバル化と都市間交流の基礎的研究：国際港都横浜とアメリカ」文部科学省科学研究・基盤研究(C)研究課題番号：23530200
本稿はこの成果の1つである.
- 15 拙稿「横浜とカリフォルニア」『季刊 横濱』第37号（2012年7月，神奈川新聞社）を参照.
- 16 前掲，羽田博昭論文参照.
- 17 *Memorandum: History, Purpose and Plan of the Yokohama American School Hq. Eighth Army, APO 343, 12 May 1947*, Ruggieri Collection.